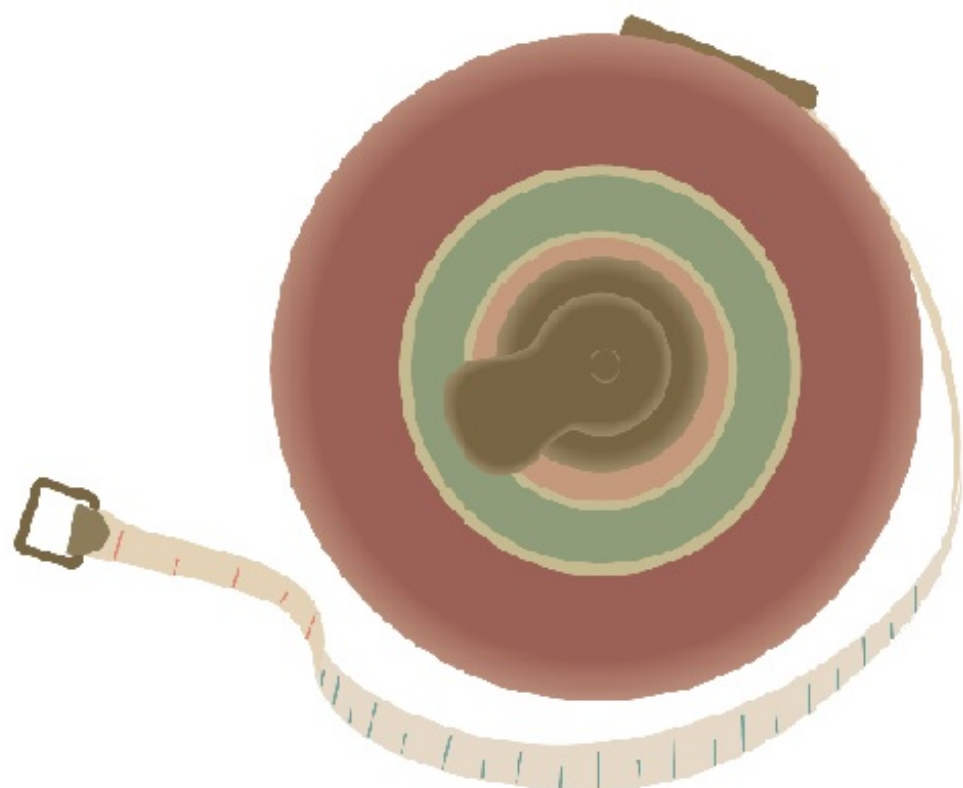


使命



堀田耕介

使命

堀田耕介

私は使命を果たそうと思った。

小さいころ、父はよく兄弟を連れてきた。兄弟だ
とって私に数人の子どもを紹介するので、兄弟
なのかと思って仲良くしようとした。仲良くなると
きもあまりそうでないときもあった。兄弟と仲良く
遊んでいたのに、いつのまにか父が来て彼らはいな

くなると言ひ、實際いなくなることもよくあつた。いなくなつたのかと思つて黙つていた。一人になつたら本を読んだ。しばらくすると父がまた別の子どもたちを連れてきて兄弟だと言つた。そうなのかと思つてまた仲良くなつて遊んだ。家には砂場があり、井戸があり、池があり、いちじくの木があり、梅の木があつた。生垣の根元で一緒にジガバチを掘り出したり、いちじくの木にたかるアリたちを集めたり、砂場に水を撒いて洪水にしたりした。しばらくするとまた父が来てまた新しい兄弟を連れてきた。

ずいぶんうじゃうじゃいるなと思った。砂場に数人、いちじくの木にも数人、縁側に数人、何とかして井戸の底に降りてやろうとたくらんでいるのが数人いた。

ある日兄弟たちは突然いなくなった。父は頭をかかえていた。私は一人になったのでまた本を読んでいた。父はどこかに行ってしまった。私はそうなのかと思った。

私は周りと同じように六歳になると小学校に行き、十二歳になると中学校に行き、自然に学校を

出て自然に就職した。仕事場は工場で、大きな丸型のステンレスの地肌と、緑色のプラスチックの部分が、大きな水筒のような形をした機械があった。私は菜っ葉色の工場服を着て、工場長の指示どおり、あつちを回したりこつちを回したりしていた。工場といってもさほど大きくなく、学校の教室を少し小さくしたような無機質な空間の真中にその機械が置かれ、何人もの私と同じような菜っ葉色の服を着た若者たちがその機械をいじっていた。その機械が何をするものなのか私は知らな

かったが、十二時になると休憩し、五時になると退社して、毎日が過ぎて行った。

毎日同じように日が昇り、毎日同じように日が沈んでいったが、私には不満はなかった。朝の冷たい光の中、朝露の降りた雑草の生い茂る道を工場に向かい、夕方日が傾いたら工場を出て、時には同僚と酒を飲み、時には同僚の女の子とデートして夜を過ごし、また朝になったら工場に出かけて行った。工場の機械は相変わらずステンレス色にかがやき、緑色のプラスチックはつやつやしていた。

よくわからないが、機械も元気そうでよかったと思
った。

毎日仕事は続いていった。土曜日は半ドンだった
が、やがて週休二日制になった。休みの日は家でレ
コードを聞いて過ごしたり、同僚の女の子と鴨場
にデートに出かけたりした。彼女は鳥を見るのが
好きで、バードウォッチングの双眼鏡を持っていた。

やがて私たちは結婚した。結婚式には会社の同
僚がたくさんやってきた。工場労働者の決起集会
のようだった。部長の「結婚生活三つの教訓」を聞

いたり、同僚の「お嫁サンバ」を聞いたり、「部屋とワイシャツと私」を歌って泣きじゃくる三人組の女の子がいたりした。新婚旅行はラムサール条約に指定された湿地帯を回り、げっぷが出るほど鳥を見てすごした。

結婚しても仕事は変わらなかった。相変わらず同じ部屋に通い、相変わらず同じつやつやした機械の相手をしていた。やがて係長になり工程長になったが、やってることにはさして変わらなかった。相変わらず私はこの機械が何をするものなのかよく

わからなかったし、誰も気にしていなかった。やがて子どもが生まれ、妻は退職し、私は工場に通いつづけた。

娘が4歳になった年、会社が倒産した。「結婚生活三つの教訓」も「お嫁サンバ」も「部屋とワイシャツと私」もみな一斉に路頭に迷った。私は工場を引き渡す一人に指名されたので、結局菜っ葉色の服を着て工場に通っていた。ステンレスの機械はさすがに元気がなさそうで、緑色のプラスチックにも

つやがなく、それが悲しかった。いつものように機械をいじりながら、機械を工場の床に固定したボルトを外し、重機で機械を持ち上げ、搬出して大きなトラックに乗せると、機械はどこかへと運び出されて行った。工場はがらんとしてひろびろとして、私は泣いた。がらんとした空間の中に突然がやがやと声があったが、それは一瞬で聞こえなくなった。工場が昔を懐かしんでいるのだと思った。やがてわずかばかりの退職金をもらい、同僚達は三々五々散り散りになっていった。

私は家族を食べさせるため、職業訓練所に通った。職業訓練所でパソコンの講習に通い、初級コースをマスターして上級コースに入ると、上級コースの講師は子どもどころいなくなった父だった。父の教え方は相変わらずよくわからなかったが、私はよく練習して上級コースをマスターした。父は私を見つけると何事もなかったかのように笑いかけ、今度またおまえの家に新しい兄弟を連れて行く、と言った。私は黙って無視した。

数か月たって、私は簡単な文書を打ったり表計

算を使ったりする程度の事務の仕事につくことができ、毎日通い始めた。桜の頃だった。妻は倒産に驚いていたが、私が再就職できたのでほっとしていた。会社の終わる時間に娘を保育園に迎えに行つて一緒に夜の桜の公園を歩いて帰った。肩車していた娘が途中で眠くなつたので背中におぶい、肩から薄いカーデイガンをかけた。

日曜日、父が兄弟を連れてきた。私は追い返そうとしたが妻が止め、家に招き入れた。ローンの残つたマンションの一室で、父と兄弟たちは饒舌に喋

っていたが、私はビールを飲んで黙っていた。私が乗って来ないので、父は兄弟たちを連れ、帰って行った。それから数回、日曜日の毎に父は突然現れそのたびに違う兄弟たちを連れてきた。あるとき娘が熱を出し、妻が休日診療の病院に連れて行っていったときに父が兄弟たちを連れて訪ねて来たので門前払いにしたら、それっきり父は来なくなった。

仕事は順調で、毎日簡単な事務ばかりだが、何の意味があるのかよくわからない招待状や社内文書や命令書を毎日黙々と打ちつづけた。何の意味

があるのかよくわからないスプレッドシートを作ったり、円グラフを書いたり、新入社員の女の子のプロフィールを写真入りで社内報に掲載したりしていた。娘は小学校に入り中学校に入り、高校を出てホームステイをきっかけにカナダに留学し、そのまま向うで結婚した。私は三十になり四十になり五十になり、妻も同じように年をとっていった。

その頃から私は毎日夢を見るようになった。毎日誰かが出てきておまえの使命を果たせ、というのだ。それは父のような気もしたが、父ではないよ

うな気もした。使命とは何なのかよくわからなかったが、とにかく果たさなくては、と思った。

カナダにいる娘が手紙を書いてきて、こちらにこないかと誘った。私にその気はなかったが、妻はとも乗り気だった。結局妻だけカナダに渡ることになり、成田に送って行って手を振って分かれた。展望デッキから滑走路を見ると、妻の飛行機だけが大きく光って見えた。隣にアジアナ航空とトランスオーストリアン航空のジェット機があった。妻の飛行機は予定通りに飛び立って、予定通りに夕方の空に消

えていった。

私はがらんとした部屋に戻り、几帳面な妻が片付けていったリビングのソファに座り、テレビをつけてみた。面白い番組は何もなかった。私は冷蔵庫からライムジュースとビーファイターとシュヴェツプスのトニックウォーターを取り出し、ジントニックを作った。苦い味がした。

私は使命を果たそうと思った。ただ、使命が何なのか、よくわからなかった。

その夜私は夢を見た。私は山の中にいた。山中では私は、笹の葉を集めていた。たくさんの笹の葉を集め、リュックサックに詰め込んだ。それから、伸びきった竹から竹の皮を剥いだ。竹の皮もまた笹の葉とは別にリュックサックに詰め込んでいた。竹林の空気はさわやかで、日の光はやわらかかった。私は竹林に行ってみたいと思った。夢の中で、ときどき苦さが襲ってきた。映像も音声も、匂いも感情も伴わない、ただの純粹な苦さだ。それは私が、

いつも感じているものだった。

次の休みの日、私は空のリュックサックを二つ背負って、電車を乗り継いで山に出かけた。「お嫁サンバ」が新しい仕事が見つからず、実家に帰って炭焼きになっているのを思い出し、電車とバスを乗り継いで訪ねて行ったのだ。「お嫁サンバ」も半ば白髪が混じり、山の老人くさくなっていた。私が笹の葉と竹の皮がたくさんほしい、と言うと、そんなもの何にするんだ、といぶかりながら山の中を案内してくれた。彼の炭焼き小屋からそう遠くないとこ

ろに竹林はあり、笹の葉も生い茂っていた。私は笹の葉を集めだしたが、すぐに馬鹿にかさばることに気がついた。「お嫁サンバ」に相談すると、使っていない小屋があるから刈り取ったものはそこに持って行って、必要な分だけ取っていらぬ部分は外に積んでおいてくれれば、あとはこちらで処分する、と言ってくれた。私は笹を刈り取ると小屋に運び、大きな葉を集めてそれ以外の部分を小屋の外に積んでいった。竹林に行って竹の皮を剥がし、それも小屋に持っていった。思ったより重さがあるので

そこで乾燥させてもらうことにし、その日は取れるだけ取って詰め込めるだけ詰め込み、東京に帰った。東京に着いたときには深夜になっていた。

次の週末、今度は朝早く電車に乗って「お嫁サンバ」の村に出かけると、昼過ぎには着くことが出来た。「お嫁サンバ」の小屋のところまで来ると、彼は先日私が積んでおいた笹の山を、火をつけて燃やしているところだった。ちょうど熊笹が生い茂って刈らなきやいけなところだったから助かったよ、と彼は笑った。私はちよつと、彼に対する気兼ねがな

くなつた気がして、一緒に笑つた。

その日も笹を刈り集め、竹の皮を剥いだ。先日
から置いておいた笹の葉と竹の皮はだいぶ乾いてい
て、先週よりずっと軽く、ずっとたくさん詰め込め
た。私は「お嫁サンバ」に礼を言い、またたくさんの
笹と竹の皮を背負つて帰つた。

次の週の水曜日の夜、「お嫁サンバ」から電話が
かかつてきて、まだ竹の皮と笹の葉は要るのかとい
う。まだまだ必要だというと、ちようど大規模に笹
刈りをする事になつたから、こつちで刈り取つた

分をトラックで送ってやるぞ、ということになった。私は願ったりかなったりだと思い、礼を言った。次の週末の土曜の朝、軽トラいっぱい笹の葉と竹の皮がマンションの一室に運び込まれた。隣家の人は目を丸くしていた。

私は笹の葉を編みあわせ、また糸で縫い合わせ、糊で貼り合わせ、一枚の大きな笹のシートを作っていた。最初はなかなかかはかどらず、一日で少ししか大きくならなかつたが、やがて仕事に慣れて来ると、シートはどんどん大きくなっていった。私はそ

のシートを丸め、直径1メートルくらいの大きな円筒を作った。二つ目は最初よりもだいぶ早く、だいぶ上手に出来た。

いくつも円筒が出来上がると、私は竹の皮を張り合わせ、とんがり屋根を作って行き、円筒に接続した。巨大な砲弾のような形の、中が空洞の笹竹細工のカプセルが出来た。私は週末ごとにこの笹竹細工のカプセルを作り、リビングにも寝室にもベランダにも巨大な砲弾がいくつも並べられていった。なぜこんなものを作るのか私には分からなかつた。

ったが、工場で機械をいじっているときも、会社でパソコンをいじっているときも、なぜこんなことをするのか考えたこともなかったもので、こういう作業をしても特に気になることはなかった。と言うよりも、意味のわからないものを作っているからこそ熱中することが出来たのだ。

やがて材料を使い終えたとき、家の中には全部で十二の巨大な砲弾ができあがっていた。私は満足した。これははじめて、自分が作ろうと思って自分の意志でつくったものなのだ。何をつくったのか

はよくわからないが、とにかく私は作り上げたのだ。

私はひとつの砲弾に作りつけたドアを開け、砲弾の中に入ってみた。山の中の、懐かしい笹と竹の皮のにおいがする。わざと隙間をたくさんつくっている。外光も入ってくる。ちよつとした癒しの空間、竹の皮のカプセルだ。私は心底リラックスしてきて、カプセルの中でのびのびした。空間は思ったよりも広く、私はうとうととしてそのまま眠ってしまった。

やがて気がつくくと雨が降っていた。私はあわててベランダに飛び出、外で乾かしていた砲弾の群れを家の中に取り入れた。ベッドルームから居間にかけて並んだ巨大な十二の砲弾は壮観だった。まるでキリストの十二使徒のようだと思った。

その時、いつの間にか父が現れていた。

「お前の兄弟を連れてきたよ」

すると十二の砲弾の中から、見知らぬ男たちが現れた。

「私たちはあなたの兄弟です」

外では雷が鳴り、稲妻が光った。急に停電し、周
りの住戸からわあつと悲鳴があがった。私は気を
失った。

気がつくと私は、部屋の中に転がっていた。十二
あつた巨大な砲弾は、まるで夢のように消えうせ
ていた。私は娘の部屋をのぞき、リビングをのぞき、
巨大なカプセルを探した。すると、ベッドルームの
上に、ひとつだけちんまりしたカプセルが残っていた。
ちようど人が一人入れるくらいのそのカプセルを

開けてみると、中には一人の女性が入っていた。妻だった。私は急にいとしくなつて妻をカプセルの中から運び出し、ベッドに寝かせた。私と同じだけ年を取った妻が、ベッドの上で寝息をたてていた。

私は、使命を果たしたのかもしれない、と思つた。